

第40回 歯科衛生研究会プログラム

日時 平成26年3月5日(水) 16時30分～19時22分

会場 日本歯科大学新潟生命歯学部 アイヴィホール

<16:30-16:35>

「開会の辞」

特別講演

座長 浅沼直樹

<16:35-17:35>

『医療安全からみえてくる医療者の心』

久保敏郎(新潟保健医療専門学校副校長)

<17:35-17:45>

質問時間

<17:45-17:55>

感謝状の授与・記念写真

<17:55-18:05>

休憩

一般講演

座長 遠藤祐香

<18:05-18:17>

1. 唾液中の抗菌タンパク質 mRNA 量と口腔衛生との相関性

○佐藤律子¹、土田智子¹、宮崎晶子¹、佐藤治美¹、筒井紀子¹、原田志保¹、菊地ひとみ¹、煤賀美緒¹、高橋明恵¹、梨田智子²

(¹新潟短期大学、²新潟生命歯学部生化学講座)

<18:17-18:29>

2. QOL維持に貢献する唾液

—その働きと分泌機構—

○今井あかね¹、佐藤律子¹

(¹新潟短期大学)

<18:29-18:41>

3. エナメル突起とエナメル滴の出現頻度について

○高橋正志¹、森 和久²、又賀 泉¹

(¹新潟短期大学、²新潟生命歯学部口腔外科学講座)

座長 小林えり子

<18:41-18:53>

4. 歯科衛生科 平成 25 年度教育グループ活動報告

○川崎美紀¹、遠藤祐香¹、坂井由紀¹、島由美子¹
(¹新潟病院歯科衛生科)

<18:53-19:05>

5. 日本歯科大学新潟病院歯科衛生科

口腔ケアグループ平成 25 年度活動報告

○風間雅恵¹、榎 佳美¹、鈴木明子¹、渡部 泉¹
(¹新潟病院歯科衛生科)

<19:05-19:17>

6. 平成 25 年度 学術・研究グループ活動報告

～学術研究活動の新たな取り組み～

○高野貴子¹、野島恵実¹、長谷川沙弥¹、池田裕子¹、近藤敦子²
(¹新潟病院歯科衛生科、²新潟病院総合診療科)

<19:17-19:22>

「閉会の辞」

ポスター展示

P 1. 外傷性咬合を伴った慢性歯周炎の一症例

○長谷川沙弥¹、内山美幸¹、坂井由紀¹、中村俊美²、阿部祐三²、佐藤 聡³
(¹新潟病院歯科衛生科、²新潟病院総合診療科、³新潟生命歯学部歯周病学講座)

P 2. 日本歯科大学新潟キャンパス敷地内禁煙実施前後の喫煙率の推移

○大森みさき^{1, 2}、筒井紀子²、山口 晃^{1, 2}、吉江紀夫²、長谷川勝彦^{1, 2}、佐野公人^{1, 2}、小松崎明^{1, 2}、長田敬五^{1, 2}、池田裕子^{1, 2}、中村直樹^{1, 2}、赤柴竜²、菊地ひとみ²、齋藤雅子²、廣安一彦²、佐藤 聡¹、黒川裕臣^{1, 2}、関本恒夫^{1, 2}

(¹日本歯科大学新潟キャンパス禁煙推進実行委員会、²日本歯科大学新潟キャンパス禁煙推進作業部会)

特別講演

医療安全からみえてくる医療者の心

○久保 敏郎
新潟保健医療専門学校

『「人間は、エラーをする動物である」だからこの世には安全は存在しない。』が医療安全の基本的な考え方です。「人間のエラー」つまり「ヒューマンエラー」を根本原因とする事故が起こるケースは多いのです。

ここでは、過去に起こった悲惨な事故の教訓からどのように事故を未然に防ぐ努力を行ってきたのかを学ぶ。その過程で人間の特性を知り、医療を行う私たちはどうあるべきかを考えていきたい。

【過去に起こった悲惨な事故】

1. 日航ジャンボ機墜落など

【事故分析から見えてくる人間の特性】

1. 生理的身体的特性
2. 認知的特性
3. 集団の心理的特性

【事故に対する取り組み】

1. 日航の取り組み
 - 1) 意識改革：自分や家族が乗客だったら
 - 2) 組織改革：孤立文化、閉鎖文化は認めない
 - 3) 安全担当中枢組織：参謀本部とプロスタッフを
 - 4) 事故の教訓：現場と実物は重要な教科書
 - 5) ヒューマンエラー：隙間と落とし穴に気づけ
 - 6) 情報：情報は速度と共有で価値が2倍になる
 - 7) コミュニケーション：壁を破る言葉を探せ
 - 8) 欠陥発見法：失敗学は見る眼を豊かにする
 - 9) 誇りと意欲：生きがいは安全確保
 - 10) 安全文化：「2.5人称の視点」
 - 11) 行政、メディア、利用者へのかかわり：「安全文化国家」の創造のために
- 以上11項目を提言した。

本日の学びを今後の「国家資格を持ったプロ」としての人生に生かして欲しい。

<p>唾液中の抗菌タンパク質 mRNA 量と口腔内衛生との相関性</p>
<p>新潟短期大学¹、新潟生命歯学部生化学講座² ○佐藤律子¹、土田智子¹、宮崎晶子¹、佐藤治美¹、筒井紀子¹、原田志保¹、菊地ひとみ¹、煤賀美緒¹、高橋明恵¹、梨田智子²</p>
<p>【目的】唾液中には、唾液腺由来の mRNA が安定な状態で含まれていると報告されている。我々は、唾液から抽出した RNA 試料から数種類の mRNA を検出し、唾液中 RNA が有用な生体材料になることを報告した（日本歯科衛生学会 2011;6:163）。今回は、唾液中の抗菌物質である histatin-3 の RNA に注目し、この遺伝子（HTN3）量と口腔内の衛生状態との相関性を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【対象および方法】被験者は女性に限定し、健康者 13 名（本学職員、年齢：23 歳～58 歳）を対象とした。唾液採取方法は、採取 1 時間以内の飲食、喫煙、ブラッシングをせず、RNA 抽出唾液は無刺激の自然流出全唾液を 1 mL 採取し、RNeasy Protect Saliva Mini (QIAGEN) を用いて RNA を抽出した。カリエスリスク検査用唾液はパラフィン・ワックスを噛む刺激唾液とした。</p> <p>RT-PCR による HTN3 および ACTB の検出：cDNA 合成には Transcriptor First Strand cDNA Kit (Roche) を用いた。RT-PCR を行い、Multi Gauge V3.0 (Fuji Film) を用いて電気泳動後の HTN3 および ACTB のバンドを定量し、内部標準 (ACTB) との比を HTN3 レベルとして示した。</p> <p>口腔衛生状態の測定および判定方法：Orion Diagnostica 社の Dentocult®SM, Dentocult®LB, Dentobuff®Strip を使用し、測定評価および問診項目結果を 0～3 のスコアで示した。</p> <p>【結果】HTN3 レベルは試料により著しい差が認められた。HTN3 レベルと年齢との間には、弱い負の相関性がみられた。HTN3 レベルと唾液流量、唾液検査およびカリエスリスクとの間には相関性が見られた。しかし、HTN3 レベルと問診スコアおよび細菌・プラーク量との間にはほとんど相関性が見られなかった。</p> <p>【考察】ヒスタチンは、抗菌作用、抗真菌作用、また近年、損傷治癒作用を有するとされている。本実験では唾液中のヒスタチン mRNA 量と細菌およびプラーク量との相関性はほとんど認められなかったがカリエスリスクと相関性があったことから、唾液中のヒスタチンは口腔内の健康状態を予測する指標になると考えられた。</p> <p>【結論】HTN3 レベルが高いほど、カリエスリスクが低いことがわかった。唾液中の HTN3 レベルが口腔衛生環境に影響することがわかった。</p>

<p>QOL 維持に貢献する唾液 — その働きと分泌機構 —</p>
<p>新潟短期大学 ○今井あかね、佐藤律子</p>
<p>【目的】超高齢社会である現代では単なる長寿だけが医療現場の最終目的ではなく、クオリティ・オブ・ライフ (QOL) の維持が求められている。正常な唾液の分泌はこれを考える上で最も重要な基本要素といえる。口腔乾燥を訴える患者の症状としては口腔内粘膜が渇き口の中がヒリヒリする、スムーズに話すことができない、食事がおいしくない、うまく飲み込めない、感染症にかかり易い、虫歯になり易い等々がある。唾液の主な成分は 99% 以上を占める水分であるが、残りの 1% 弱の大部分を占める唾液タンパク質が唾液に多くの機能を持たせている。今回は口腔環境を考える上で唾液がどのような働きをしているか、どのように分泌されているかを教科書レベルから最近の知見を踏まえて解説する。筆者はこれまで唾液腺の開口分泌機構について解析してきたので、その研究の意義を理解して頂くことを目的としている。</p> <p>【方法】ラットの耳下腺腺房細胞にストレプトリジン O を用いて処理をし、膜透過性細胞を調製する。その細胞に各種抗体やリコンビナントタンパク質など導入してアミラーゼ分泌を測定する。</p> <p>【結果】アミラーゼ分泌に関与しているタンパク質の抗体を唾液腺細胞に導入すると有意にアミラーゼ分泌を阻害した。</p> <p>【考察】唾液分泌に関与するタンパク質の抗体を唾液腺腺房細胞内に導入したとき、抗原となるタンパク質が阻害されて正常な働きができず、結果として分泌ができなくなる。そのときのアミラーゼ分泌を測定することにより、どのタンパク質が唾液の分泌機構に関わっているのかを考察することができた。また、アミラーゼを含む分泌顆粒が細胞内でどのような挙動を示しているのかも推察することができた。</p> <p>これまで唾液の分泌は直接命と関わりを持たない分野として研究者も少なく基礎研究が遅れており、不明な部分が多かった。唾液の研究は地味である。しかし、唾液成分は免疫力を左右する因子や病気の診断材料として、分泌機構は口腔乾燥症の原因解明や治療のヒントにつながるとしてたいへん重要である。</p>

エナメル突起とエナメル滴の出現頻度について
新潟短期大学 ○高橋正志、又賀 泉 新潟生命歯学部口外学講座 森 和久
<p>【目的】 歯周病の発現との間に密接な関連がみられることが報告されているエナメル突起とエナメル滴の出現頻度について検討した。</p> <p>【材料と方法】 抜去後、ただちに10%中性ホルマリンで固定した日本人の上下顎大白歯640本を使用した。肉眼および実体顕微鏡下でエナメル突起およびエナメル滴の表面形態を観察・記録し、出現頻度をもとめた。その際、特に根面溝、頬・舌側面溝との位置関係に注目した。エナメル突起およびエナメル滴の詳細な表面形態を、定法によりS-800型走査電顕（日立）で観察した。エナメル突起とエナメル滴の頬舌側方向の研磨標本作製し、偏光顕微鏡、位相差顕微鏡、マイクロラジオグラフィーおよび走査電顕で観察した。</p> <p>【結果】 エナメル突起の出現頻度には左側と右側では多少の差がみられたが、ほぼ同様な出現頻度を示した。エナメル突起は頬側面で最も多い傾向がみられた。上下顎とも第3大白歯で最も多く、第1大白歯で最も少なかった。頬側面のエナメル突起の内、Grade3とGrade2を合わせた値は、上顎よりも下顎で多い傾向がみられた。第3大白歯ではエナメル突起がセメント質に覆われている場合が多かった。エナメル滴は、上顎では近・遠心面で多く、下顎では頬・舌側面で多かった。上顎第3大白歯で最も多く、次が下顎第3大白歯であった。エナメル滴はすべてエナメル突起の延長上の根面溝にみられた。エナメル突起とエナメル滴の頬舌側方向の研磨標本を偏光顕微鏡および走査電顕で観察すると、すべての標本でエナメル質中層では小柱構造が明瞭であったが、深層では不明瞭であり、表層ではエナメル質表面に平行な層板状構造がみられた。</p> <p>【考察】 今回の観察では、エナメル突起が上・下顎第3大白歯の頬側面で100%みられたが、鈴木(1958)では上顎；47.9%、下顎；32.5%と少なく報告されており、これはセメント質に覆われたエナメル突起を見落としたためと思われる。ヒトではエナメル突起の出現頻度が第3大白歯で最も高く、他の動物の大白歯や小白歯ではほとんどみられない点から、エナメル滴だけでなく、エナメル突起も退化的形質であり、ヒトの歯にみられる特異的な形質であると推察される。エナメル突起やエナメル滴を構成するエナメル質の小柱断面の形態は歪みが強く、この見解を支持する。</p>

歯科衛生科 平成25年度教育グループ活動報告
新潟病院歯科衛生科 ○川崎美紀 遠藤祐香 坂井由紀 島由美子
<p>【はじめに】 歯科衛生科ワーキンググループは平成25年4月より新体制として始動した。われわれ教育グループでは、「大学病院に勤務する歯科衛生士として必要な知識・技術・態度を習得し、良質な医療と教育を提供するための現任教育を確立する」を歯科衛生科の長期目標に掲げた。そこで、今年度は「学内外の研修会に積極的に参加し、臨床の場に活かす」を短期目標に活動をしたので報告する。</p> <p>【活動内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内外の研修会・学会の参加状況の調査 ・情報提供（広報誌：PrePre だより）：2回/年 ・現任教育のコーディネート ・教育グループ：現任教育（教育活動計画書の作成について） <p>【活動結果】 平成25年4月から平成26年1月まで毎月、学内外の研修会・学会の参加状況の有無を調査した結果、学内では、計23回開催され、そのうち参加を認めたのは11回であった。また1人当たり平均4.16回の参加を認めた。特に、歯科衛生研究会や新潟口腔ケア研究会の参加が多かった。学外では、1人当たり平均2.23回の参加を認めた。総合診療科（以下、総診とする）と総診以外の科で比較すると、総診が1人当たり平均1.08回に対し、総診以外の科では1人当たり平均3.06回の参加であった。内容は歯周治療関連、口腔ケア関連やインプラント関連など多岐に渡っていた。</p> <p>【考察・まとめ】 学内の研修会・学会において、23回のうち11回しか参加していないことに関しては、開催時間が早いものや、臨床系ではなく基礎系の研修会が多く、また歯科医師向けのものが多かったためと考えられる。</p> <p>学外では、総診と総診以外の科で、参加に差がみられたのは、配属先の専門分野について興味が湧き、専門性を追求する意志が働いたと考えられる。また、学内での研修会・学会において、歯科衛生士対象の内容が少ないため、参加しているものが限られ、学外での参加が積極的であったと考えられる。</p> <p>活動開始し、まだ1年であるが様々な分野での研修会・学会の参加の有無が確認できたため、今後もこの活動を継続し、比較することで各グループの現任教育に活かし、さらなる歯科衛生科の教育活動に努めていきたいと考える。</p>

<p>日本歯科大学新潟病院歯科衛生科 口腔ケアグループ平成25年度活動報告</p>
<p>新潟病院歯科衛生科 ○風間雅恵 榎佳美 鈴木明子 渡部 泉</p>
<p>【目的】歯科衛生科口腔ケアグループでは、「患者ニーズに対応する口腔ケアを提供する」を長期目標に掲げ、体制を整える為に活動を行っている。H25年度は、短期目標を「口腔ケアに使用する材料の情報を共有し、活用する」とし、現任教育の為に院内研修を実施した。今回は、その内容と研修後、歯科衛生科でのアンケートを行い、今後の課題を検討したので報告する。</p> <p>【対象】日本歯科大学新潟病院歯科衛生科30名</p> <p>【方法】今年度、病院5階研修医研修室にて平成25年6月20日に「コンクール」、口腔ケアセンターにて6月26日「ルシェロ」、9月4日「プリニア（音波振動歯ブラシ）」、平成26年1月23日「ソニックエアー（音波式電動歯ブラシ）」の4つの研修を行い、その後アンケートを実施した。</p> <p>・配属科・卒後年数の他、以下の6項目で調査を行った。</p> <p>① 出欠席とその理由 〈出席の場合〉</p> <p>② 開催時間</p> <p>③ 開催場所</p> <p>④ 研修内容</p> <p>⑤ 今後の活用について</p> <p>⑥ その他</p> <p>は、該当するものに○をつけ、その理由を7項目から選択してもらった。②から⑥は、5段階評価とし、⑥のその他の意見・要望は自由記載とした。</p> <p>【結果】今年度行った4回の研修は、いずれも1日開催であったことから、欠席の理由として「都合が合わなかった」が最も多かった。配属科によっては全員出席が困難な科もみられた。しかし、急な開催にも関わらず、4回行った研修出席率の平均値が72%と高く、そのうち「興味があった」と回答したものはいずれも半数以上であった。開催時間は「適当（非常に適当も含む）」が96%で、開催場所についても99%となった。今後の活用については、4回行った研修の平均値で70%が「活かそう」と回答した。しかし、研修日からアンケートまで期間が空きすぎたこともあり、無回答となったケースもあった。</p> <p>【考察】来年度は複数回の開催を検討し、早めにインフォメーションを行うなど、より積極的に活動し、口腔ケアに使用する材料の情報を共有していきたい。また、開催直後にアンケートを実施するとともに、研修後の活用状況についても追跡調査を行いたいと考える。</p>

<p>平成25年度 学術・研究グループ活動報告 ～学術研究活動の新たな取り組み～</p>
<p>新潟病院歯科衛生科 ○高野貴子 野島恵実 長谷川沙弥 池田裕子 新潟病院総合診療科 近藤敦子</p>
<p>【はじめに】学術研究グループは、平成20年度から5年間の活動を通し、歯科衛生士の学術・研究活動に対するモチベーションの向上に努めた。その結果、歯科衛生科全体のモチベーションの向上がうかがえた。そこで今回、向上したモチベーションを維持していくため、学術研究グループでは、平成25年度の長期目標を「歯科衛生士業務の実践を基盤とした学術研究の浸透と堅持に努め、さらにエビデンスにも寄与することによって、人々の健康と福祉に貢献する」と掲げた。新たなグループメンバーで活動した今年度の報告および来年度以降の展望を得たので報告する。</p> <p>【対象】日本歯科大学新潟病院歯科衛生科31名</p> <p>【活動内容】</p> <p>①情報提供（情報誌：Study ニュース）</p> <p>②活動状況の把握（講演会等参加状況の調査）</p> <p>③歯科衛生科および個人の学術研究活動の把握</p> <p>④研究発表の支援（統計の資料配布等）</p> <p>⑤歯科衛生士専門雑誌の紹介</p> <p>⑥歯科衛生科の業績報告書作成</p> <p>【活動結果】学術研究グループの新たな活動として、統計の資料配布と歯科衛生士専門雑誌の借用制度を行った。統計は、統計の目的や用語等を説明した資料を各診療科に1部ずつ配布した。そのためか、歯科衛生士一人一人が確実に目を通したのが不透明であった。歯科衛生士専門雑誌は、現行の歯科衛生士専門雑誌の各科回覧では、最後に回覧する科はセミナー情報が1か月遅れになってしまう等の問題が挙げられ、セミナー情報等を各月初旬に各控え室に配布し、閲覧したい雑誌があれば旧1診へ借用する新制度を設けた。設置場所が旧1診のためか借用者は1階控え室が多かった。</p> <p>【考察】この試みは開始して1年であり、新たな活動が歯科衛生科全体に浸透されていない様子がうかがえた。統計は、資料配布したばかりなのもあるが、実際に経験する機会がないと興味が出ていく理解しにくいと考えられた。歯科衛生士専門雑誌は、借用者が1階控え室に集中しているため借用場所の問題なのか、学術研究に対するモチベーションの低下なのか調査が必要と考えられた。今後は、配布資料および本グループの活動についてアンケートを行い、要望を明確にし、その意見を参考に本病院歯科衛生士の学術研究モチベーションの維持に努めたいと考える。</p>

外傷性咬合を伴った慢性歯周炎の一症例
<p>日本歯科大学新潟病院歯科衛生科 ○長谷川沙弥, 内山美幸, 坂井由紀 日本歯科大学新潟病院総合診療科 中村俊美, 阿部祐三 日本歯科大学新潟生命歯学部歯周病学講座 佐藤聡</p>
<p>【はじめに】歯周治療では、歯周基本治療、SPT・メンテナンス治療において歯科衛生士は大きな役割を果たしている。その役割の一つであるブラークコントロールの確立が治療を通して大きな割合を占めるが、多くの症例において何らかの修飾因子が関与している。なかでも外傷性因子に対する力のコントロールは、安定した口腔内環境を維持していくために不可欠である。今回、歯周病の増悪因子である外傷性咬合の除去を歯周基本治療と併行して行うことで、歯周炎進行の予防と歯周組織の安定を得られた患者の初診から5年間の経過と歯科衛生士の役割について報告する。</p> <p>【初診】30歳、女性。2007年12月19日。歯磨きの時に奥歯から血が出ることを主訴に来院。口腔既往歴は大学生の頃近医を受診。修復処置を施され、口腔清掃指導や歯石除去の経験もある。全身既往歴、家族歴に特記事項なし。</p> <p>【診査・検査所見】 口腔内所見：17, 14, 24, 27, 46, 47に4mm以上の歯周ポケットを16, 36には約6mmの歯周ポケットを認めた。動揺度は27で2度、36, 46で1度認めた。また、27は挺出していた。X線所見：17, 16, 26, 36, 46に垂直性骨吸収を認めた。27には水平性骨吸収を認めた。また、小白歯から大白歯にかけて歯根膜腔の拡大を認めた。</p> <p>【診断】限局型重度慢性歯周炎</p> <p>【治療計画】 歯周基本治療（モチベーション、口腔清掃指導、SRP）、と並行してブラキシズムに対する指導、再評価、歯周外科手術、補綴治療、SPT。</p> <p>【治療経過】 ①歯周基本治療（モチベーション、口腔清掃指導、SRP）、と並行してブラキシズムに対する指導②再評価③歯周外科手術：16, 26, 27, 36, 46④再評価⑤補綴治療⑥SPT</p> <p>【考察・まとめ】本症例は、外傷性咬合によって歯周炎が増悪したと考え、歯周基本治療と並行してブラキシズムに対する指導を行ったことが歯周組織安定の一因になったと考えられた。また、患者が口腔内の現状と問題点を理解した上で積極的に治療へ参加することも重要だと改めて感じた。（第56回日本歯周病学会2013春季学術大会にてポスター発表）</p>

日本歯科大学新潟キャンパス敷地内禁煙実施前後の喫煙率の推移
<p>日本歯科大学新潟キャンパス禁煙推進実行委員会¹ 日本歯科大学新潟キャンパス禁煙推進作業部会² ○大森みさき^{1,2}筒井紀子²山口晃^{1,2}吉江紀夫²長谷川勝彦^{1,2}佐野公人^{1,2}小松崎明^{1,2}長田敬五^{1,2}池田裕子^{1,2}中村直樹^{1,2}赤柴竜²菊地ひとみ²齋藤雅子²廣安一彦²佐藤聡¹黒川裕臣^{1,2}関本恒夫^{1,2}</p>
<p>【目的】日本歯科大学新潟キャンパス（新潟生命歯学部、新潟短期大学）では、平成19年4月1日から敷地内禁煙を実施した。日中喫煙できない環境を作ることによって喫煙率の低下する事が期待されるが、実際にはどのように喫煙率が推移するのか敷地内禁煙化前から今年度までの定期健康診断時（6月中旬）に喫煙状態について質問紙調査を行った結果をまとめたので報告する。</p> <p>【方法】定期健康診断時の質問紙は記名式で、平成16年の調査は無記名である。また、参考資料として敷地内禁煙化が決まっていない時点の平成16年に学生を対象に行った質問紙による喫煙と健康に関する意識調査での喫煙率のデータを提示する。</p> <p>【結果】平成16年の学生の喫煙率の平均は32%で、今は吸わない喫煙経験者は20%、非喫煙者は47%であった。敷地内禁煙化が決定した平成18年の定期健康診断時の学生の喫煙率は17.7%、職員は19.4%であった。敷地内禁煙が実施された平成19年は学生の喫煙率は14.2%、職員は14.0%であった。その後年々減少傾向が見られ、平成25年は学生の喫煙率は6.5%、職員は6.1%であった。学年別でみると、1年生の喫煙率は毎年どの学年と比較しても最も低い2年生は成人したことや若干名の編入生がいるためか高くなる傾向がみられた。5,6年生の喫煙率は敷地内禁煙化当初はまだ高い傾向があったが、喫煙できない環境での生活が長くなったためか、ここ数年は10%を切ることもあった。平成23年国民栄養調査結果の20代日本人男性の喫煙率は39.2%、女性は12.8%であることから、比較してかなり低くなったことが明らかとなった。</p> <p>【考察】毎年、防煙教育講演会を行っていることや禁煙支援室を設け、不定期に敷地内外の巡回をしていることもあり、校門付近など敷地外での喫煙者を時々見かけるものの、学外からの苦情なども減少してきており、喫煙者の減少は数字で表されたのと実感が一致している。喫煙の口腔への為害性は明らかで禁煙指導については歯科に期待される部分も大きいことから、今後も地道にきめ細かく個々の喫煙者に対応し、喫煙に対し無関心になりがちな非喫煙者にも喫煙の害をアピールし、喫煙に対して正しい認識で対策に取り組むよう大学全体で取り組んでいきたい。（第23回日本禁煙推進医師歯科医師連盟学術総会2014.2.23にて発表）</p>